

博物館都市巡り①

エディンバラ（スコットランド）

高橋 哲雄

はじめに

比較地域研究所の小田さんから、あたらしく発足する商業史博物館の紀要に海外の博物館の紹介記事を連載しないか、と持ちかけられたのは夏まえのことだった。与えられたスペースがかなりあったので、私はそれならもうひとひねりして「博物館都市巡り」なんてのはどうかと、逆提案した。つまり、街全体が博物館のように保存の価値があり、またしかるべき保存の手が加えられていて、しかも現在生きて使われている——つまり動態保存型博物館を都市全体に広げたようなものを、かりに「博物館都市」と名づけて、そうした都市を対象にしたらユニークなシリーズになるかもしれない、と思ったのである。

小田さんの快諾を得たので、都市の選択にかかった。「保存の価値」といっても、歴史的価値か美的価値かという問題がある。私としては

両方を満たす都市がほしい。歴史的にも重要な役割を果たし、都市景觀にも見るべきものがあり、できれば豊富な文化財に恵まれている、といった条件を考えたのだが、これはヨーロッパではとくに贅沢な条件ではなく、候補の都市には困らない。しかし、まずは「一切を保存する島」といわれるイギリスからスタートしようと思った。

「一切を保存する島」というのは、一九世紀のアメリカの作家エマースンの『イングリッシュ・トレイット』（一八五六）に出てくる言葉である。ここに出てくる一八四七―八年のイギリスは、現在と比べると信じられないような光景をみせる。すべてが早いペースで動き、瞬時にして巨富が築かれ、年間労働時間は大陸の三倍、陽気で気短か、ホラ吹きで大声で話す。「国民性」なんてものは、時代によって変わるものだということを教えてくれる貴重な観察にみちている。

一八四七―八年というのは、イギリスが工業化の道を行く独走ランナーになり、活気に溢れていた時代であり、同時に労働・政治運動が激化しはじめた葛藤の時代——『共産党宣言』——の時代であった。

テムズ河はドブ川になり、スモッグが空をおおい、スラムには悪臭が立ち込めていた。そうした良くも悪くもダイナミックな時代に、同時に「一切を保存する」という、現在につながる伝統がすでに生まれていたのである。いまのイギリスはよく「ミュージアム・ネイション」と半ば揶揄を込めて呼ばれるが、それはけっして老大国になってからのことではない。

さて、その「博物館の国」のなかで、第一に取り上げる「博物館都市」はどこにしたらよいか。私の選択は新生スコットランドの首都エディンバラである。

なぜエディンバラか

エディンバラを選んだのは、一言でいえば、それが中世以来のオールド・タウンと一八世紀に造成されたニュー・タウンから成る「ハイブリッド・シティ」であって、その両者が見事に融け合い、補いあって希有な都市機能と景観美を醸し出しているからだ。世界の大博物館とくに美術館には、それぞれ拮抗する内容を持った「中世部門」や「近代部門」を抱え込んだ例が間々あるが、それを連想させる。

中世の町が時代を下がるにつれて周辺にスピルオーバー（溢出）せざるをえなくなり、市域を拡大させた例は珍しいことではない。しか

し、多くは無秩序な、そのときどきの要求への対応から生まれたパッチワーク的広がりであって、エディンバラのように、同じく中世の町の過密からスタートしたとはいえ、明確な思想にもとづく計画的な街づくりが、今ふうにいえば「町衆」の手によって行われ、あたらしい街自身のみごとな作品として出来上がったばかりでなく、オールド・タウンも新たな生命を吹き込まれてよみがえる——といった例は、ほとんどみることができない。一九九五年にユネスコの世界遺産に指定された所以である。わが国でも、京都、奈良が指定を受けたが、あれは古建築物群を主とする文化財に対してであって、街の全体が対象になっただけではない。

街を歩く——オールド・タウンから

エディンバラには鉄道で入るとしよう。いや、空港からのバスも、街の中心ウェイバリ駅に着くのだから同じことである。この駅は、二つの東西に走る馬の背のような丘にはさまれた谷底（かつては沼）にあって、南の丘に旧市街、北の丘に新市街が広がっている。同じ丘といても、旧市街の方がひとときわ高くそそり立つ。

駅から旧市街への急な登りの西側の道をとると、丘の西端の高みを占める城の前の広場に出る。城は三方が断崖の巨大な要塞で、同時に王宮でもある。ここから四方を眺めると、意外に海が近いこと、「七つの丘」と呼ばれるようにいくつもの丘をめぐらしていることがわかる。

城から東へ伸びる馬の背様の尾根筋が旧市街の中心街で、ゆるやかな下りとなって旧城壁（今はない）を越え、一マイル余（二・八キロ）先のホールリールド離宮に達する。二つの王宮をつなぐ、この繁華で歴史的な構造物の多い通りを「ロイヤル・マイル」と呼ぶ。歴代の国王が往き来したからであろう。ここには大聖堂や、宗教改革のリーダーであったノックスの旧居など、歴史や文学上のいわれのある場所が多い。

ロイヤル・マイルを背骨として、そこから「にしんの骨」と呼ばれる路地が両側に無数に出ている。急傾斜の、狭く入り組んだ暗い路地で、しかしところどころに開けた踊り場のような広場がある。暗いのは、周囲の建物が中世以来、この国では珍しく高層だからだ。一七世紀には一〇階を越えるアパートも出現した。城壁に囲まれた狭小な地域だったから空に伸びたというだけではない。スコットランド法に特有の永代賃貸制によって地代が高くなったせいもある。「テナメント」と呼ばれる、多くは賃貸のアパートはスコットランド名物で、テラス・ハウス好きのイングランドと、はっきり異なったタウンスケープをみせる。

高層アパートは、もちろん厄介な存在である。早い話が、寒冷国の必需品である石炭袋（五〇・八キロ）をかつき上げるのには、壮丁でも五階（日本流には六階）が限度とされた。高い階は貧民用だった。便所も上層階には設けられないので、夜十時以後は糞便は窓から投棄された。当然狭い路地の衛生状態は言語に絶するものとなる。また人



旧市街遠景

目につかぬコーナーが随所に出来ることは、犯罪の温床ともなった。エディンバラ生まれの作家R・L・ステイヴンソンの『ジークル博士とハイド氏』の二重人格はこの町の明暗の投影だといわれている。そういえば、この近くのファイフ出身の現代ミステリー作家イアン・ランキンも好んでエディンバラの暗黒面を描いている。ちなみに、彼のヒーロー、リーバス警部の所属するクレイグミラー地区は、旧市街でも新市街でもない、西部の外れ、新興開発地で、エディンバラとしては犯罪多発地帯である。

南側の路地を降り立つと下町

が広がる。その中心がグラスマーケットで、中世は公開処刑場でもあり、旅館や飲食店が集中していた。ワーズワス兄妹の泊まったホワイト・ハートは今もパブとして営業している。さらに南へ進むと、エディンバラ大学があり、その西には劇場・文化地区がある。ちょっとしゃれた食事ができるのも、古本屋歩きができるのもこのあたりである。

スコットランドの大学は一五、一六世紀に主要四大学ができ、エディンバラ大学はその最後の一つである。イングランドのオクスブリッジに比べ実学の伝統がよく、一八世紀には教学の水準で完全にそれらを凌駕したといわれる。時あたかも「スコットランド啓蒙」といわれる思想運動が、ヨーロッパ思想界を引っ張る働きをした。当時の大学や法曹界などの知識人は実によく集まり、よく語ったようで、「マーケット・クロスに立つて手を挙げれば、二、三分のうちに五〇人の第一級知識人を集めることができる」といわれた。オールド・タウンの狭小さがプラスに作用したケースである。その百五十年後、生物学者・社会学者として有名なバトリック・ゲッデスは「町のどまん中で、しかも隔離された」条件をねらって、城の真下の北側斜面のラムゼイ・ガーデンに学生寮や知識人の「知的ユートピア」をつくり、一八世紀の再現をめざした。

ニュー・タウンを歩く

しかし、ニュー・タウン構想が生まれたのも、これら知識人の間か

らである。オールド・タウンのあまりの過密と居住条件のわるさに、街の北側の丘に橋を架けて新しい街をつくらうという計画が持ち上がった。それも単なる住宅地づくりというのではなく、広場や公共施設、街路ごとの性格の使い分けまで考えた、本格的なプランである。

東西の端に二つの広場をおき、その間を三本の主要街路で結び、それらの間にはさまれた裏通りには商店主、職人、小商人向けの住宅や仕事場を配した。さらにこれらの通りと直交する南北軸の通りは、はじめから賃貸用に設計されていた。しかし、外観は邸宅用のテラス・ハウスと見分けがつきにくいので「にせお邸」と呼ばれた。これらの工夫によってこの町は単なる富裕層向けの住宅地でなくなり、階級の混在と生活の利便が実現されたのである。

三本の大通りのうち、南側のプリンシズ・ストリートは、多くの人によって「ヨーロッパでもっとも美しい通り」と呼ばれる。たしかにここは通りの全体が展望台となっていて、南に切れ落ちるテラス状庭園の谷の向こうに立ち上る旧市街と城の景観は言葉を失うほどであり、また通りそのものが教会やモニュメントの尖塔群、両端を扼する二つの豪華ホテル、公園中央の二つのギリシャ様式の建造物群が独特の調和をつくり出し、さらにアクロポリスに似たカールトン・ヒルやアーサーズ・シート、ソールズベリ岩稜などのピクチャレスクなスカイラインが遠景を締めくくる。

私はこの通りに面したMホテルを三十年来ほぼ定宿のようにしているが、値段がけっこう高くせにサービスの質の低いここを、今も使

うのは、ひとえに部屋からの圧倒的な眺めによる。これに匹敵する眺めは、サンジェルマン・アン・レイのアンリ四世パピリオン——ルイ十四世の生まれた館がホテルになっている——からのパリ遠景か、ナンシーのスタニスラス・ホテルからの広場全景ぐらゐのものであろうか。眺望を完璧なものにするため、高い階の出窓の部屋を予約するのが私のささやかなぜいたくである。

しかし、ニュー・タウンの眺めを、というのであれば二筋北のジョージ・ストリートのジョージ・ホテルがいい。ここはあまりに観光化されたプリンシズ・ストリートの喧噪に比べると、通りの品格も高い。北側の最上階に部屋をとると、ニュー・タウンの全景がフォース湾にいたるまで一望できる。緑が多く、教会の尖塔を除くと高層ビルがまったくなく、建物の高さも石の材質も揃っているのが眼に快い。ここはホテル自体の質も高く、くつろげる。

ニュー・タウンの街並は基本的にテラス・ハウスで、それにテネメント（アパート）が加わって出来ている。テラス・ハウスは上から下までが一世帯だが、テネメントの各世帯はその一部（一層ないし二層）を占めるにすぎない。地下階（ベースメント）だけの居住者もいて、そのため外部階段が玄関前についている。テラス・ハウスのばあい、地下階はキッチンや収蔵、召使部屋などに使われる。かつてはテラス・ハウスの玄関には呼鈴（ベル・プル）が、テネメントのそれにはゲイト・プルと違って、各階と直接連絡がついて上からの操作でドアの開閉もできる仕掛が付いて、見分けがつくようになっていた。こういう

装置は召使がドアの後ろで待つているテラス・ハウスでは不要であり、逆に労働者のアパートには許されない「ぜいたく」であった。労働者階級の都市であるグラスゴウでは、ゲイト・プルはまったく見受けられず、「グラスゴウ子」はこれをエディンバラの「非友好性」の象徴だと、あてこすりの材料にしていた。基本的に専門職階級中心のミドル・クラスの街であるエディンバラならではの仕掛なのである。

ニュー・タウンを歩くのはよほどの建築愛好家か都市研究者の仕事であるらしく、観光客の姿はプリンシズ・ストリートかジョージ・ストリートの周辺を除いてはめったに見かけられない。しかし、こまかくみていくと、路上観察者にとっては思考を刺激する材料に事欠かないのである。たとえば歩道にマンホールのような蓋があるが、これは多くのばあい馬車で運んできた石炭の投げ入れ口なのであって、歩道の下は石炭収蔵庫になっている。そうなると、歩道は私道なのだろうか、公道でも地下はその目的には使える法的措置があるのか、といった疑問が湧いてくる。実はニュー・タウン用の土地の大部分は造成の四〇年も前に市当局によって先行取得されていて、それを開発業者にきびしい条件を付けて永代貸していることがわかった。つまり、今日のわれわれが考えるような公私の区分は存在しないのである。

おわりに

こういう歩き方が「博物館都市」巡りにふさわしいかとなると、好

きずきであろう。かつて私はロンドンの科学博物館に通い詰めたことがあるが、あれは巨大なびっくり箱であって、一見なんでもないように、実は不思議なもの、珍しい物で溢れ返っている。都市も博物館のようなもので、〈読む〉という操作を通さないと、何も見たことにはならない。そう思ったことが、私の街歩きのスタンスをきめる原体験となっている。

今回は、この街が抱えている多くのすぐれた博物館施設についてはまったく触れなかった。一つだけ取り上げるとすれば、植物園であろう。多数の世界的なプラント・ハンターを生み出し、名庭園師を輩出したスコットランドにふさわしい名園であり、とくに大温室は特筆に値する。このカフェまえの芝生から谷越しにニュー・タウンを眺めるひとときは、私に「隠れ家のやすらぎ」を約束してくれる。